

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

編集後記

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

3

(開始ページ / Start Page)

64

(終了ページ / End Page)

64

(発行年 / Year)

1959-08-16

編 集 後 記

本号巻頭の鼎談は、この四月五月の間モスクワ、レニングレード、プラハの各大学で講義をされてきた近藤教授のいわば土産話である。六月十四日正午羽田に到着したスカンヂナビヤ航空の飛行機から、教授が二カ月ぶりに姿をあらわしたとき、その相変らずのハンチングに風呂敷包といういでたちに接して、

出迎えの一同思わず欲（嘆？）声をあげたのだが、そのようないでたちにふざわしい国際的かつ民族的視角からの見聞談は、教授自身の撮影になる数々の作品とともに好箇の読物たりえているとおもう。なお、これらの作品は数冊のアルバムに収められた全体のほんの一部分にすぎない。彼地のDP屋さんは「貴下の技術はともかくカメラは非常に優秀である」とかいったよしだが、ここに掲げたものだけからでも、教授の腕前の端睨すべからざることを諒知されるであらう。

右の鼎談においていただいた西尾実教授は、本年めでたく古稀の齢を重ねられ、五月十六日東京会館に数百人が会して盛大な祝賀の宴がはられた。当夜のスピーチによれば国立国語研究所勤務の諸嬢の間において先生は

ミスター・国研（国語研究所の略称）に目ざれているという。おそらく諸嬢の推挙は、孫ほども年のちがう若い者と時にはむきになつて論争される先生の若々しさに着眼してのことにちがいない。願わくば先生、その壮者を凌ぐ学問への熱情をもって、いつまでもわれわれ後進を裨益下さらんことを。

また、鼎談の司会役小田切秀雄教授は、この七月まで法政大学教職員組合委員長という劇職を背負っておられた。法政の組合運動はつい先ごろ大学教組では未曾有のストライキ決行寸前という緊迫した状況にあったが、この春季闘争を小田切委員長のもと約六百人の組合員が結束してたたかってきたわけだ。なお委員長は七月に改選となり、現在は広末保教授にバトン・タッチされている。

はからずも日文科教授の近況報告のような具合となったが、卒業生各位も論文の投稿はもちろん短いものでよいかから動静・感想の類をよせてほしい。次号からはそういった欄ももうけたいと思っている。

なお本年四月から日本文学科の助手として阪下圭八、杉本圭三郎が就任した。学会の事務にはもっぱらこの兩名があたっている。

（阪下記）

一九五九年八月一六日発行

定価 八〇円

日本文学誌要 第三号

編集委員 法政大学国文学会

近藤 忠義 小田切秀雄

小原 元 正木 信一

丹慶英五郎 滝瀬 爵克

阪下 圭八 佐瀬三千夫

野村 誠一 遠藤 進

印刷者 東京都中央区銀座東三ノ七

東銀座印刷出版株式会社

電話東銀座(54)三九四七

発行所 東京都千代田区富士見町

法政大学大学院内

法政大学国文学會

電話東京(30)二三五一番

振替東京六九四三番